

1998年度 第2号目次

- (1) 6月例会のおしらせ
- (2) 7月例会のお知らせ
- (3) 夏の学校のお知らせ (第一報)
- (4) 5月例会報告
- (5) 会費納入のお願い
- (6) 住所および連絡方法の確認についてのお願い

(1) 6月例会のお知らせ

日時：6月20日(土) 15:00～

場所：明治大学駿河台校舎 大学院棟 503 教室

発表者：三浦英樹(極地研)

『第四紀後期の東南極氷床の変動とそれに関わる諸現象—北半球との相違と地球全体の現象との関連性—』

(2) 7月例会のお知らせ

山岳永久凍土研究グループと合同で7月4日(土)に極地研において7月例会を行います。詳しくは後日連絡いたします。

(3) 夏の学校のお知らせ (第一報)

今年度の「夏の学校」は、8月下旬に松岡憲知先生(筑波大)を講師にお迎えして南アルプス間ノ岳周辺において行います。詳しくは次号でお知らせします。

(4) 5月例会報告

去る5月16日、明治大学において発表会を行いました。当日は東北地理学会と重なったこともあり、参加者は9名と大変少ないものとなりました。皆様お忙しいことは存じますがより積極的なご参加をお待ちしています。

青木賢人(東京大・院)：

現成氷河の質量収支から検討した AAR (Accumulation Area Ratio) 法の妥当性

氷河地形から古環境復元を行う場合は氷河の質量収支を復元する必要がある。AAR法は氷河の涵養域と消耗域の面積の関係から均衡線高度を復元する考え方の一つである。しかし、均衡線高度は氷河によって年度によって大きく変動することが現成氷河での収支の実測から明らかになっている。このためAAR法から均衡線高度を算出することに雪氷学者の強い抵抗がある。本発表ではAAR法の妥当性を現成氷河の質量収支から検証したところ、質量収支が均衡しているとした場合、氷河のタイプに依存せずAARは60%に集中するとの指摘がなされた。

Fluctuation of Glaciers (IAHS-UNESCO) に掲載されている1970～1990年分のデータから、単年の質量収支・収支算出期間・涵養域面積と消耗域面積・氷河のタイプ、がそろっている氷河を抽出しデータセットとして用い(氷河数:129 観測期間:最長32年、最短1年)、現成氷河の質量収支とAAR値の相関を検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

- ・ 現成氷河のAARは一定の比率に収束せず、バラツキが大きい。
- ・ 氷河面積、氷河のタイプ、平面形、末端形状とは無関係。
- ・ 質量収支とAARの値には、正の相関が見られる。

・ 氷河ごとの質量収支とAARの値の間には高い正の相関が見られる。
・ 各氷河の質量収支の均衡を仮定した場合、AAR値は60%前後に集中する。
以上の結果と、モレーンは氷河が長時間安定しているときに形成されるという点を併せて考えると、氷河地形からAAR=60%によって復元した均衡線高度は、復元される古氷河の質量収支が均衡し平衡状態に達していたときの均衡線高度といえる。したがって、経験的に用いられてきたAAR法は、雪氷学的に見ても比較的妥当なものであると思われる。

(文責：都立大 福井)

奈良間千之(東京都立大・院)：

西バミール・Raygorodskogo氷河の小氷期以降の氷河変動

Little Ice Age (LIA) は世界的に同時に生じたがタイムスパンや氷河の前進期に地域差があり、アジア内陸地域のLIAの氷河変動は天山など一部地域で明らかになっているに過ぎない。バミールにおいてもLIAの氷河前進期の違いは十分考えられる。そこでlichenometryによる西バミールのLIA以降の氷河変動の解明を、中央アジア・マツチャ地方Zeravshan氷河山群のRaygorodskogo氷河を対象に試みた。

Raygorodskogo氷河のLIA拡大期は大きく2回生じ、JuniperusのDBHやモレーンデータからLIA以降の氷河変動は現在の氷河末端から1km以内で生じていた。LIAの3つのモレーン(M4,M5,M6)の位置は集中しており、氷河前進規模はほぼ同じである。Raygorodskogo氷河のLIA最拡大期は17世紀半ば～後半、18世紀末に生じ、これはZeravshan山脈で得られたJuniperusの年輪編年学データ(Maksimov, 1972)の気温低下期とほぼ調和的である。Raygorodskogo氷河は西天山、アルタイと同様LIA後期に最拡大期が生じたが、その変動規模は小さい。

M3は19世紀後半に形成され、モレーンの規模・構成礫はLIAの3つのモレーンに比べると小さく、この頃LIAの氷河前進期は終わっている。この氷河は30年前100m前進した後、LIA以降最も急速に後退(30年間で340m)しており、これは旧ソ連各地域の氷河末端変動と逆の傾向を示している。また、バミールの他地域と比較してもその変動規模はかなり小さく、西バミール周辺の氷河も同様である。乾燥地域の中で比較的降水量の多い西バミールの氷河変動は、他地域と異なる傾向を示している。

(文責：都立大 近藤)

(5) 会費納入のお願い

前年度と同じく会費は郵便局の振り込みでお願いします。なお、お送りしました封筒の宛名書きのタックシールに記載されている数字は、会費未納入の年度です。96、97と記されている場合は96年度・97年度が未納ということです。3年間会費未納の方は通信の発送を停止しますのでご了承ください。

寒冷地形談話会 00100-9-171342 1,500円/年です。

(6) 住所および連絡方法の確認についてのお願い

通信の一号に同封したはがきをまだ返送されていない方は、新名簿作成のため、寒冷地形談話会会員を継続するか否か、現在の住所(7ケタの郵便番号を明記)、所属、e-mailアドレスをご記入の上、至急事務局宛にご返送ください。なお、e-mailアドレスをお持ちの方は、寒冷地形談話会通信の発送を電子メールのみとする「メール会員」への移行にご協力くださるよう、お願いします。

事務局：〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1
東京都立大学地理学教室寒冷地形談話会事務局
TEL. 0426-77-1111 (EXT. 3836)
e-mail: aoyama@gcog.metro-u.ac.jp
URL: www.comp.metro-u.ac.jp/~sugimoto/kanrei/